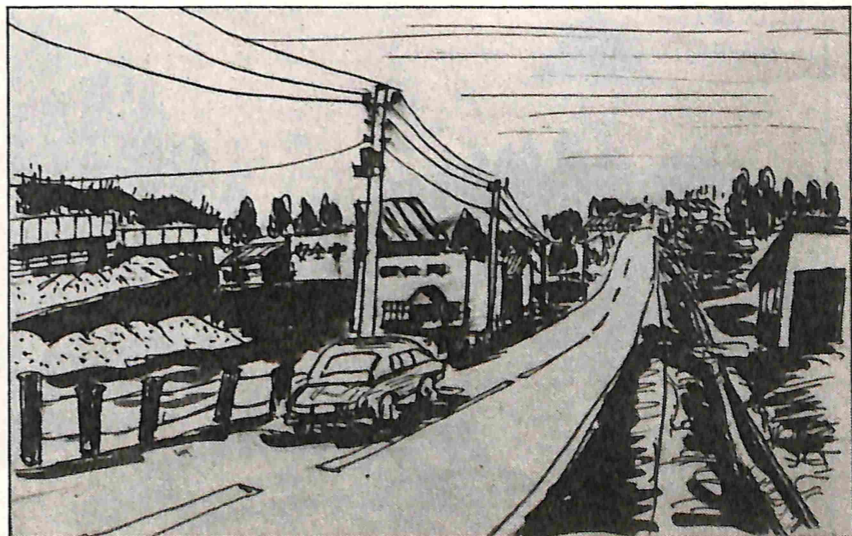
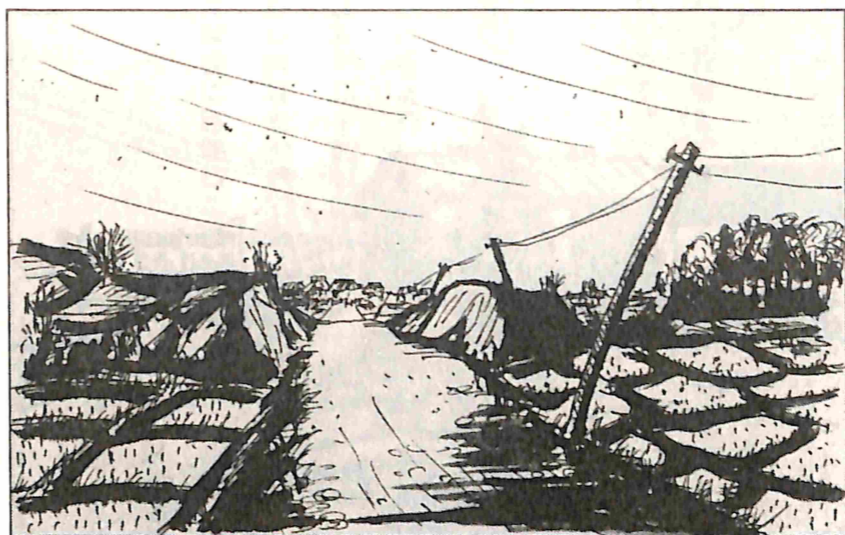


タテ
館コ切り割り

畑中町から奴橋を渡ると館コの切り割りにかかる、西から吹きつける地吹雪に路面が埋もれる難所

で、春の雪融けに村中の人が出て雪切りするのが、年中行事の一つであった。今は路面両側の土が切り取られ住宅地となった。



一ツ森喜良市道

嘉瀬駅から喜良市に向って、小栗崎東端れに出ると坂を下る。喜良市の小田川部落が一望される



田圃に出る。右側田圃の中にポツンと、観音山(立山)のはしニツ森のとなりに一ツ森の古噴があった。が、その古噴も切り取られた。跡地は三上高速碎石工場となった。



観音坂

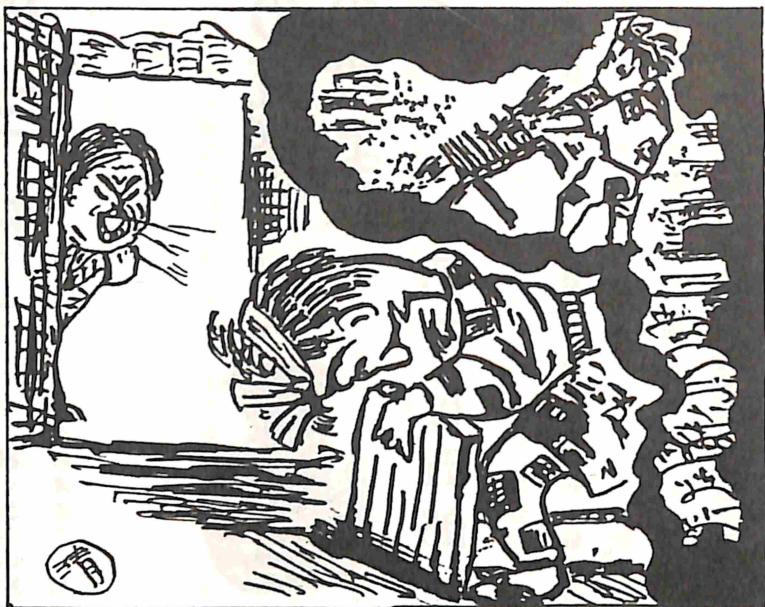
嘉瀬小学校前から観音山スキー場に登る道路で、水神祠にくると観音の坂道となる。山肌をけすり



取った道路は流水に穴だらけ。単板のスキーを担いで、スキー場に登ったものだった。今は路面も補装され、自動車は頂上まで、崖地は町営住宅に変わった。

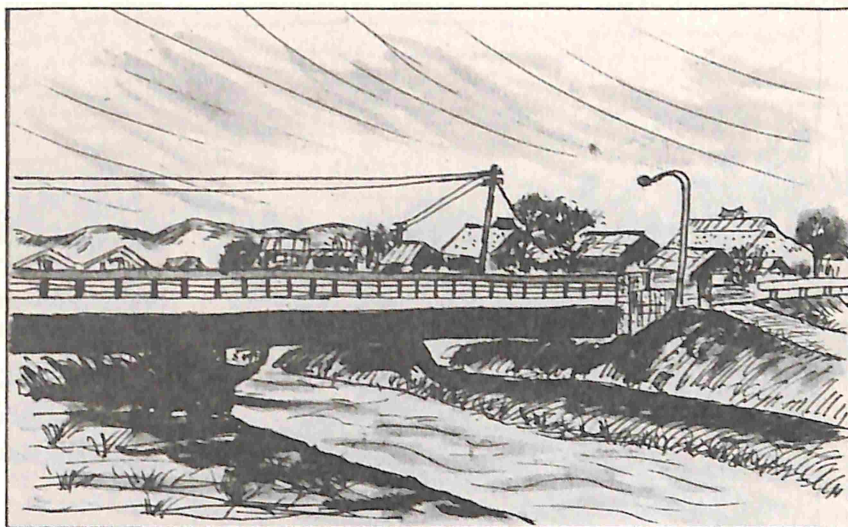
糞たい冷

嘉瀬話 ①



金九郎は、『花田屋』の借子である。
昭和の初期まで、稲の脱穀には、千歯扱(せんくき)が使われていた。
大きな櫛を横にして、その齒の中に稲をはさみ、何度も引
っ張って脱穀したもので、したがって、当時の稲扱きは、

号線バイパス道の新奴橋が架けら
れ。古町を西風地吹雪から守った
雷樹(ポプラ)の防風林も、今は
見られず、古町は、まともに西風
にさらされている。



古町から川境・イマスの田圃
に出るには、小田川に渡した板
の橋を通るが、今は国道三三九



命にある。
松も枯れはじめ、その姿を消す運
命にある。



工藤家墓地
カラカサ松

朝暗いうちから、日暮れまで、幾日もかかり、借子にとっ
ては、指の間から血を流し程のきつい仕事であった。
金九郎は、ときどき、稲扱きの手を休め、便所に行く。
それは、便所にしゃぎみ込んで骨休みするためだった。借
子には一分の休けいもないし、稲扱きは、もう二十日も続
いていた。

しかし、金九郎の作戦も、すぐに オガサに見破られて
しまった。オガサ柳眉をさかだて、声も荒々しく、金九郎
のそばにやってきて、

オガサ 『金九郎、ナ ズンブ 便所サ イグナア』

金九郎 『うん、ワ 腹クダテセエ』

オガサ 『ウソコグナ たった今 ナの後(お前)から便所さ行っ
て見だども、糞がら なんも湯げコ上(あ)がてネエ、
ナンモ糞してネエ』

オガサ 『腹もくだってネエ、空骨休(からほねや)みこの』

金九郎 『オガサ、オガサ、マイジ、冷飯サ デゴツゲば
れカ(喉)へで、湯げコあがるクソでるわけネエーべ
サ』

—— 木村 ——

紙上討論ゼミナール

米コ糠ヌカ三升

古くから津軽では、「米糠三升あれば婿に行くな」のたとえがあり、「婿ア死ぬまで婿」と定義付けられ、婿は弥三郎節の男性版なのか。
古くからの農村の因習、社会情勢からみて、婿の定義と視点について、あなたなら、どうとらえることができるか、また、考えられるか、あなたなりの私見をもって述べて下さい。

浄瑠璃

『卯月の紅葉』
の段より



花田 証五郎

三の教詞がつく言葉は昔からいろいろ誇張、尊敬、いましめ、軽蔑等に使用されています。

白髪三千丈、三尺下がって師の影踏まず、三徳（財布）三助（奉公人、浴場で客の体を洗ってやる男）、仏の顔も三度、舌先三寸、胸三寸、女三界に家なし、三日坊主、三ツ子の魂百までも、三下り半（三行事に書く離縁状）まだまだ沢山ある。

普通「ムコ」というと、娘の夫として入籍した男であり、家の家督相続に深い関係があるように思われているが、そうでないのである。婿養子縁組がなされなければ、ただの入り男で、家督相続には何んの関係もない一介の男にすぎないのである。ただの娘の夫である。

室町中期の浄瑠璃「卯月の紅葉」の段に、「こぬか三合有らば入婿するな」と語られているところからすると古い時代から、こぬか三合の財産があったら婿になるなど言われて来たことがわかる。それが米糠三升到昇格となったものである。

「ムコ」には、婿養子縁組と年期智があり何れも労働婚の一つと言われている。養子縁組の婿は、ずっと苦難を耐え、がまんし続けると家督相続の機会があるが、年期智の方は、一定期間三年から十年位の間、どんなことを言われても、じっとがまんの子でなければならず、男性としての主体性は全く認められず家の内外において責任ある発言は認められず、只ただ、労働力を提供する機械的存在としか認められず、一定の期間がとけて、いくばくの財産等をもたらって独立日計ようやく一人前の男として認められる。

養子縁組の婿様は一生の間、男としての主体性、主張は認められる機会が極めて少ない時代があった。
それで、取るに足りない財産、即ち米糠三合あれば婿入りするな、と言われて来たものと考慮されます。

終戦後強くなったものは、女の権利主張と靴下であると言われたが、私は現在ではそれに一ツ加えて、婿の発言力と、その権力であると言いたい。

米糠三合、三升、三斗、そんなものではない、現在では黄金的存在で

糠は、穀類を精白するときに出る脱皮むくがのことで、東日本では粉糠、津軽、南部では小糠「コヌカ」がなまって「コノガ」となって適用している。糠は、昔から貴重でないものとされている。
ほんの少しの財産のことを「糠三合分」等と軽蔑の言葉とされている。喜びの期待外れのことを「糠喜び」等ともいう。
さて「ムコ」であるが、日本の古語では「モコ」である。津軽、南部では、なまって「モゴ」と呼んでいる。

普通「ムコ」は女扁の婿を使用しているが本来は婿である。
古代においては、「土」は男子の意味即ち「さむらい」である。「土」は十を一を合せた文字であり、十進法は数の呼称の基本であり、一をきいて十を知る。というように極めて才能があることの代名詞でもある。さて、女扁の「ムコ」は娘方の親から見ると、娘の夫であることから婿に転じたとされている。
そのほか、智もあるが省略する。

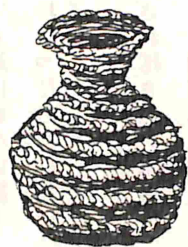
ある。

（筆者

金木短歌会長）

婿の定め

秋元惣之進



男子の、相続者が無い家では、家系を守るために婿を貰うことになるが、貰う時は一談も八談も法螺を吹き、婿は簞笥・長持と三ツ物を揃えて婿入りする。当初は、三国一の花婿として大切にされ、良い兄（婿）もろたと云うが、次第に義理の両親のお面（顔）が変わってくる。婿は労働力の主体であり、一口に言くと、婿は、仕事が旺盛で、素行がよいといと婿の資格が無いのが一般的だ。

婿は、朝アまだ家人が寝ている間に、田圃を回り、朝草刈りやら、馬の手入れ、庭掃除と気の使いどうし、作業日程は指示される前から実行、精神的・肉体的にも束縛され、朝は朝星に起き、夕べは月影をふんで帰り、遅くまで働らいても気に入れないのが「婿」の定め。

呑みたい酒も、煙草も吸わないで、飯も腹一杯食べないで、気兼ねして精一杯働く、美味しい喰べ物がある時は、「婿」は、次から次へと苛酷な辛い重労働で、身体を癒やす間もなく、綿のように疲れ果てるまで働いても、言葉で「この捨て婿」と愚痴られるのが「婿」の一生。

昭和二十八年ごろは、まだ自転車が大切な乗り物だった。某婿は、田

圃が遠いので、朝、田圃を見回りに、義父の自転車を無断で田圃に乗って行った。婿が出て行った数時間後に、義父が起きてみると、玄関先に置いてあった自転車がない。義父は怒り出して、直感的に「婿」だなど、言い出していると、婿が田圃から、自転車に馬草を一杯積んで帰ってきた。義父は婿を見るなり

「この捨て婿」、自転車に乗って田圃に行き何事だ、と侃々諤々激怒し、喰ってかかったと云う。

第二次世界大戦後の、農村が解放された昭和二十八年ごろでも、「婿」はこの様な状態だったので、昔の「婿」は惨めであったと思う。義父母は、「婿」を牛馬のように使うが、娘に対する愛情を、「婿」に奪われまいとする気持なのか、また、「婿」に財産を譲るのが惜しかったのか？昔から、「小糠三升あれば婿に行くな」の諺は、裏返して、「小糠三升あれば、裸でも自立できる」と云う一つの教えでもあり、「婿」と云う言葉の響きは、一種の「アザケリ」と「サゲシミ」の何ものでも無い。

もがき言葉

木下清一



現在は氏姓を基本として、父系家族により構成されているが、古代に

また、婚家先で一生労働に飼いならされる婿よりも、若し「米糠三升」の資本があったら、独立独歩一人立ちできると云う、藩政下のもとに、苛酷なまでの労働に明け暮れ、次の世代に資産を残し得なかった、津軽農民の姿が浮き堀りにされる。腕き苦しみの「米糠三升あったら婿になるな」と云い伝えられてきて、今に残された言葉と私は解する。

妬み節

木村治利



「粉糠三合持ったら養子に行くな」この諺は、自分も次男であったからよく聞かされた。

たとえ、粉糠三合でも自分のものがあつたら気苦勞の多い養子などに行くな、自分の力でやった方がよいということであった。入婿となれば相手はいくらかの財産があるため、わがままな家付娘とさまっている。

昔は舅や姑が死ななければ家督相続はできなかった。

その間気に入らなければいつでも追い出されるのが相場であった。

婿の地位は、吹けばとぶような存在であり、粉糠三合位の価値しかない皮肉った諺でなからうか。

「つき合いをよくする婿はおん出され」

さかのぼると、母系家族構成であったと云う。

部族の保存繁栄を図るためには、他部族他邑女性の略奪も常習で、男は守弾魚獲し、女子供を養うことが義務であり、また部族を守るためには、男は戦士であった。

男がフリーに女のもとに通う習慣が平安朝まであったということは、先ごろまで津軽に残っていた夜這い行為は、その名残りではなかったらうか？

さて問題の「米糠と婿」の関連について、古代人は本能のおのくまに、自由意志で結ばれたであろうが、律令国家となり、社会構造も組織と約束事で固められ、人間が人間に統束されるにしたがって、枠内に縛られ、個人の主権がまったく支配下におかれ、徳川藩幕政下にあつては、主権は家長の絶体的なもので、その意志命令に従うしかなかった封建時代に、次三男の生きる道はどこにあつたらうか？

武家の長男は、ハゲでも、疵者でも、阿呆でも家長の座が決っていた。次三男は、後継ぎのない家に婿入りするほか、就職口がなかった。

在々百姓農家にいたつては、男は労働力の資本であり、ほとんどの小作百姓が一握りの藩や物持ち地主の支配下におかれていた。藩政時代では、次三男の独立分家することは容易でなく、婿にでも選ばれない限り、大家族のなかに組み入れられ、一生労働源の農奴におわたつたのではないか。

さてまた、当時の藩政下では、百姓は搾取に搾取され尽され、米糠三升をも持てない生活面から脱却でき得ないところから、選ばれて婿入り資本を手にすることができ「婿」に対する羨望と、ヤッカミの「婿になるな」であり。

というくらいだったから物・心ともに苦勞が多いというのである。

もちろん川柳は誇張され詠まれているが、昔から「婿は上から、嫁は下からもらえ」という常識的な判断があつたようで、やはり聳を立て一家の中心とする工夫もあつたようである。

「養子に行くか、いばらの藪を裸で行くか」とか「養子に行くか、天津なわてを裸で行くか」など悲壮なまでのことばがある。ちなみに天津噺は、渥美海岸のある烈風の名所である。

舅が横座で、イロリをキセルで叩けば、岸元でビクビク身体が震えたと述懐する聲もある。幾つになつても財布は舅や姑が握り婿には金目を与えない、借子にも劣る存在だ、苦勞が多いので早く老けこみ、財布も持たずに死んだ聲も多かった。やはり婿は男の弥三郎節であつたのか。

しかし、粉糠三升の諺は婿にも行けぬ貧農の妬み節ではなかつたと思ふ。

当時貧農の次男三男が嫁をもらつても、すぐ田畑を貰つて分家できなかった、ニラ（仕事場）の片隅か、物置の隅っこに一室を作り、ここで親や兄夫婦に二年一三年と使え、やっとやせた田圃を二、三反貰つて分家させられたものだ。従つてその生活は知っているべしである。

婿に行きたくとも選ばれなければ、婿にはゆけぬので、婿に行った人を恨む気持が粉糠三升になつたのではないらうか。

過去からの

遺言

太田忠光





私にテーマを二つあたえられた際に、悩んだのであったが、『米糠三升』のテーマを取り上げることにした。それは私が学生時代、体験したこと、婿の心境につながるのではないかと思うことがあったからである。

家族のもとを離れて生活したこのない私は、某市の素人下宿に宿をとった。その家族は、夫婦、子供三人、おばあちゃんの計六人であった。

その中に私が入っていったわけであるが、家族同然に扱ってくれ、夕食は晩酌を出してくれるなど、非常に優遇していただいた。しかしながら、私は学校から下宿に帰るのが苦痛であった。というのは、私の部屋の隣りは空部屋であったので、めずらしさも手伝ってか、よく家族がこっそり私の様子を見にくるのであった。また、風呂などもよくのぞかれた。

何ということはないのかもしれないが、他人の生活に入ったことのない私は、四六時中監視されている感じで、とても自由な気分にはたることができず、三ヶ月位で適当な理由をつけて、下宿を飛び出したことがあった。

私は私なりに、他人の家庭に入るむずかしさを知ったわけである。

昔の男尊女卑のはげしい農村社会における婿は、嫁も同じなのかもしれないが、他人の家庭に入るむづかしさなどで精神的苦勞があったものと思われ、加えて、生活を営むために朝から晩まで、働くという肉体的苦勞があり、心の安まる時がなく、大変だったのではないかと想像される。

そのため『米糠三升あれば婿に行くな』『婿あ死ぬまで婿』などの言葉が生れ、また、勞せずして、財産を得ることに對する拓^{たく}みも含まれていると思う。米糠三升あれば、姑などに虐^{なぐ}げられることなく、男性としては、一本立ちし、小さくとも自分のカマドを持った方が良く、昔の婿は大変だというたとえであると私は考える。私は小さい農家に生れたものの、長男のために、婿という事を親身になって考えたことはないが、先祖は何代か婿養子を取ったと聞く。婿は家を守るための気苦勞が大変なものと思われ、それなのに婿をたたえる言葉が残っていないのは、残念なことである。

最近出版された『津軽の人形師』の中での婿に関する金多豆蔵の会話をひろって紹介してみると

『婿になったのはうんとよかったけれどもよ、たった四日でだされてしまった』

『はあ、ずいぶんあつけねえ婿だな』

『あつけねえもなも、あんまりあけなくてよ、戸だなこ開けてみだきやよ、まだ口とり残ってあってそろ、俺酒好きだ男だんだ、婿になるときだばよ、好きな酒っこでも、あまり多くやらねえつもりであったけどよ、やっぱりこれ、好きだもの飲まねでいらねえ』

『うん、うん』

『かぐれでこっそらど飲んだわけ、それを見られたもんだどころで、この婿ねかてカマド食われでまるはで、今のうちにのめくまれて』

『……豆蔵、たった四日でも夫婦つうもんはいいもんだなあ、東京のアップよ』

金多豆蔵の会話では、おもしろおかしく話されているが、婿の身軽さ、

弱さも表現されている。しかしながら、昨今の農村社会は前進しており、婿養子は大変優遇されていると知る。私ののべた男性版の弥三郎節は、女性にもなくなったように、今では、相思相愛で結婚する方が多いため、進んで婿養子になる人が多く、時代は急激に変化してきている。米糠三升も過去の遺言である。

(金木地区農業改良普及所勤務)

米糠三升 もある



原田万治

嫁哀史の物語は都会と田舎を問わず、形を変えていろいろあるが、婿はあまり聞いたことがない。

婿という字自体が女扁に通じることは何か男性自身を投げ捨てた語韻

を感じるが、ある意味では米糠三升はまだよい方で、米糠三升あったら婿に行くのたとえがあるくらい惨めな生涯を送った例もたまに見聞する。

一般的に云って安易な気持の上で三度の食を得るが為に、男として去勢された存在にしか見られない婿という地位に甘んじて、自己を抑え、己を捨て、ただひたすらに忍従の、あつてない慣習の掟にしばられ、一度爆発すれば、馬鹿婿、捨て婿、かたくら婿等といろいろな呼称で陰で呼ばれ、浮かばれない日常生活を送らざるを得なかった例も寡聞耳にすることもある。

人間性の本来は男としての次元が変らないと思うのだが、そういう社会生活の片隅に追いやる要素が古来からの習慣ではなく、特に明治以来の富国強兵という国策のひとつのひずみである現れであるかもしれない。

男性として誰も好きこのんで婿と呼ばれる身分になりたくないだろうが、家計の都合で自己犠牲の渦のなかにある陶酔のなから、将来の苦境を覚悟で身を固めていった人達に同情を禁じ得ない。

津軽ネプタの縁起は、とおく坂上田村麻呂が 夷鎮撫のため、みちのくに侵略してき

た当時、なかでも津軽蝦夷の神出鬼没に、散々な目に合い、田村麻呂一計を案じて、大きな灯籠を作って津軽蝦夷を怯き寄せたとする伝説と、文禄二年(西暦一五九三)七月の孟荀盆に、津軽為信二間四方の大灯籠を作り、京の大路にくり出し、都人を驚かせたのが弘前ねぶたの始りとする俗説がある。

また、ネプタの原形は現在、秋田能代の灯籠にとどめていると言われるが、ネプタそのものの原流は、津軽独自のものか、仏教の伝播とともに奥羽の果てに伝わってきたものか、あなたなりに、推理と想像を働かせて、大胆に論じて下さい。

津軽ネプタ

みそぎ

行事より

吉崎正光



ネプタについて、次のことを考えてみた。

- 一、七月七日の各地方での行事はどうなっているか。
- 二、ネプタは青森県特有のものか。
- 三、ネプタの語源の意味は何か。

そのうちに、今まで知らされてきた歴史の中の田村麻呂説がだんだん薄く変ってきたのである。

私たちがこどもの頃、旧暦七月の七日には七回水浴びして、七回小豆飯を食うんだと云って、よく川に水浴びに行ったものだ。それを調べているうちに全国の行事につながっていることを知らされた。

◎栃木県足利地方では年中行事の一つとして、七月七日は若者（男女を問わず）渡良瀬川に入って水をあびる。これを「ネプトナガシ」と呼んでいる。

◎阿蘇郡の農村でも同じ行事がある。

◎愛知県北設楽郡では七月七日の祭の飾り物を八日の朝に「ネプチナガシ」といって川に流す。

◎山形県庄内地方では、七月七日の朝短冊の竹を流す。

◎秋田県横手市では六日の夜二メートル位の藁の舟に多くの燈火をつ

えられてきたが、それは事実を歪めた一方的と断定され今見直しされている。

各地方に伝えられてきた民謡、芸術、文化すべてにおいて支配権力者は、自己の手柄にしたがるが、実際は辛辣な抑圧の中で生きながらの抵抗と希望を求め努力の過程で創造され、一般庶民の総合の力によって、各地方に守り伝えられてきたものと思う。

ネプタの語源行事については、ネプタ気、睡気を流す、即ち夏のけだるさを拂拭して秋の収穫時にむけての体力づくりにも因んだ行事の一つとして「ネプタ気を流す」との語源から発し、みそぎに関連する、水浴を含めた行事がその地方に会ったように方言や行事形が違った形で全国的に普及されていったように思われてならない。

庶民の祭りは何時の時代でも戦乱時には、影をひそめ、平和時に於てのみ発展する。

大東亜戦争中、庶民の祭り事は一切禁止され、一路戦争へとかりたてられ、戦争が終って、平和を取戻して、漸やくボツボツ祭りも取戻し、次第に豪勢さを加重させてきた。近世史を見た現実から察するに、津軽ネプタの伝説は軍国主義普及欧歌の一環として、作成されたものと思われる。

先に述べた生産と生活に結びついた面から更に抑圧陣への抵抗（レジスタンス）を加味している。富宮祭りの願、ネプタ絵には悪物退治の豪相な絵を書き、夜にローソクをつけ、沢山の人に目立つようにして、日頃のウップンを晴らす。即ち退治される悪者は支配者だと言う民衆の真理があったのではないだろうか。

けて川辺でにぎわしく、七日の夜明けに流してしまふ。これを「ネムリナガシ」と呼ぶ。

◎秋田県鹿角郡北部では青森県同様「ネンプタ」南部では「ネムリナガシ」という。

◎岩手県稗貫郡八重畑では、七日の早朝「ネプタコナガシ」といって川に流す。

◎福島県耶麻郡では七月七日、七夕竹を「ネムタ流し」といって川に流す。

◎群馬県多野郡方馬町、埼玉県秩父郡でも七日の早朝川に行き「ネプタ流し」の行事がある。

◎富山県滑川市附近では旧暦六月晦日「ネプタ流し」といって、人形を作り海に流し、こども達が水あびする行事がある。

◎九州の阿蘇神社に、元は七月六日、今は八日に「ネムリナガシ」（音振り流し、眼流祭とも書く）という神事である。

このように七月七日のネプタ行事にちなんだ各地の行事を拾って見ると、ネプタの行事の起源はいつか定かでないようだ。

弘前での「ネプタ」青森での「ネプタ」（倭武多この漢字は伝説にちなんだ、後世の人がつけたあて字と思われる）もその起源は定かでない。坂上田村麻呂が蝦夷征伐のために行ったとか、津軽の殿様が京都でねり歩いたのがその起源との伝説は史実に名記されていない限り、そのまゝとは信じがたい。なぜ、そのような風説が出たのかは、支配者は常に策略に支配力に優れていることを表徴せんがためのつくり話しにねじまげて吹聴されたものと思う。

日本の国史は皇族や武家に都合よく書かれ、軍国主義強化のために教

事実をそのまま書くと禁止され、断圧されるので、支配者がよい絵模様を逆に書く、民謡の中にも「加瀬と金木の間の川コ、石コ流れて木の葉コ沈む」「なんさも利かない、関の湯」などと歌ったように……

又、ネプタは無礼講でねり歩く、特に弘前城下町では正面では向いないで、日頃の憎しみを晴らす場として浪人や下層武士は浴衣の下に金網の肌着を着、隠し刀をたづさえて出場し、怨念をはらす動機をつくって集団攻撃をかける。時には切られ死ぬ人も出るという、これを喧嘩ネプタと名命された。

文字通り、ネプタ、気怠さが覚める行事であったと思う。

それにしても、全国的にネプタの行事があるにも拘らず、弘前のネプタ、青森のネプタ行事はよく風土、気質に合った伝統を守り発展させ、いまでは日本全国否や世界的にもその目をみはるほどの豪華さを発揮している。

この現実、青森県の民衆の中から湧き出でた独特の県民の誇りとして評価してよいものと思う。

田村麻呂

戦術



青山兼四郎

大和政権が確立されて、東北の教化・経営事業は五畿七道が開かれて早